南總里見八犬傳 第九輯 二十五

特
イ曽4
600
267

特
イ
500
267

南總里見八犬傳第九輯巻之二十五

東都　曲亭主人編次

第百二十回　士卒弔眉して自家を防ぐ　餅書教ふ因て秘密を告ぐ

登時亦堅削も。徳用ゞ詭譎の送るを拾ひ足ざるを補んとそ膝を找めて。復六ふらち向ひて。目今師父の稟されし如く。結城が非道乱政る量裏ゑ師父の庇ふ倚て那家再興の欲びあり。恩を受て恩を思ふ。惟成朝のきゝぞ家の長る朝重ぞが心鳥も獣も。少ゆるを爭何ぞ。縱追放せられぞとも。危邦ゑ居るべゝ。寔ゑ浮世の栄枯廉辱。今ふ創ぬとゝ。是も菩提の種ゑれば。いで深林幽谷ふ茅を締び。ひ清して。二たび塵ふ染ゝ。と思ふ。めゝ年末の師恩を外ふ倦る時。憂を分ゝ。身單の往方を定むゞ。ふあゝねば。錢ゝくて路遥る。逆旅艱苦の伴ふ達て送届けまゝ。ゑ。身の暇を賜るべ

とのいひて胡意歎息して理のあるを虚言も時に取て紫の朱を奪ふ可るとなくも思ハ
ぬ復六を聴て忽地悖然たる怒面に顕れて开い安らぬるふてそれ結城畳ぶ謀反の椿
事ハ呂世の風聲のミふして正しく証据あるふあらぬ許ありてさけれども氏朝季基以下の
先亡その士卒ふ至るまで皆是嘉吉の逆徒ふれば年歴ありとも追薦供類ハ是憚るべ
るるふ何ぞや隣国の僧俗を招に聚合してその黨の施行を羞ぢ反て那家の香華院
る住持を逐まく欲せ一ハ京鎌倉の堂えを思ふ成朝ぞ傲慢非礼の底意も推て
知るふ足れり好るその説ハ且く措て徳用と田舎法師ふ做果さんるの惜ろ一ふ罪ふくく那
里を逐れハ是物怪の幸ひ我眼の黒うん程洛中洛外一二の名高無る大刹の住持ふ
做て紫衣僧綱の顕職ふ推登されふ田舎院ふ逆足寺ふ勝らぬ是ふ就ても感ぶ思ハ
堅削御坊の老実ふ徳用ふ法眷のさぞふ結城ふヨりけんふ今ふの時ふ従ふ者ふ只ハ
是和僧のみとぞ孝順賞ふ餘りあり山居の楽ひハ然ることぶ俱ふ這里ふ住て

栄をその師と同くせば陰徳あり陽報ふ後の恨ふ及べ一然けれども事情そなる知る
京人の口ふ絶て戸も鎖れば権且俱ふ屏居て外聞を避るふあり。その弟を呼ふ
寧ふ慰めて在奥る離亭を徳用と堅削ぶ子舎と一定め开里ふ居ふて新紀衣の相応
ぬを多く含る出く分ち取せ日毎の郷食饌好ふ儘して管待賓客ふ似れども一家児ふ
る奴婢ハふ徳用師弟の噂を聞ると特ふ敬ふく敬言れば是を知る者稀ふけり。小ふ
時徳用ふ母ハ世を去りく既ふ年来ふ及るるの父復六ふ両個の側室あり又徳用ふ弟もあり
父復六の妾腹の三男を香西再六改景と喚做るぶ君命ふよりて宅眷を引て本貫阿波ふ赴
く年来京師ふ在ざれハその弟を知ざりふ通て世の現人の親として其子の弟を知ざるふ通て世の
習俗ふれば復六を呂管ふ徳用ふ佯誑の片言を信容て送恨遣る方ふ及ふ隨ふ次の日主の改
元ふ件の事を顛末を箇様々々と密訴をゆけ隨ふ告ふ改元敬驚ふ且訝りて小ふ我
徳用ふ對面して為ふも具ふ聴ぐ及ハ白晝ハ憚りふれふあるねば日暮て相伴ひまるねといれく

○文溪堂蔵

復六怡悅み堪ぎ。宿所ゑ退りて件の便宜を。徳用ゑ耳ひそ〻ー。當晩倶ーて参りーゑ改元
則徳用と閑室ゑ召入れて。先茶を賜ひ果子を賜ふ。儞ゑ復六が密訴の趣。且結城ゑそ
わーとふその事の顛末を云云と問ふゑ徳用ハ父ゑ告る。那伴誰ゑるゑ再按の趣を盡ー
演て。結城里見と諳ーと酷ーく言果て又ふ曰ふ。他们が逆謀ハ偽ゆそいまぐ證據を沼
ざれども。天ゑ口ゑー。人をゆく言まゆるとふ古語あまべ相違あるくもいなぎ。尚二葉ゆて断ざまべ。
斧を用ゑ患ひあり。鎌倉の両管領へ征伐の兵を命せられゑべ。御後悔ゑ度ー。ゑの兵甚
麽と哄誘せば。政元一霎時沈吟ーて。和僧の意見も所以ゑふゑわーれど。応仁以来諸國乱
ゑて。陵夷皇都ゑ逮びゑ干戈ゆ。ゑく理そ。都鄙皆安堵の今ゑ至れり。开と呂風殷耳ゑ
據るのミゑそ。結城里見と征伐せば。東國是ゆ又乱れて民復塗炭ゑ淪むべ。徒れば征伐の
一條ハ他们が旗を建るゑ及びて。是を伐ゆとも遲ゆ。姑且度外ゑ措んのミ。和僧の上ゆ我が
與ゑ乳兄弟の因もあれば。いざ皇都の大刹へ移轉の便宜を計ひて。時を待てそゆわれと

慰られて。徳用ハ心ひかるゆと思へども。犯て諫ん実事ゆくれば。陽ゑ寛仁大度と稱ゑ。餘
談ゑ短夜深ゑけり。是ゆ後も政元ハ時々悄地ゑ徳用と召よせて。下總上總の風俗人
氣の好ゆと尋問ふゑ。徳用是ゑ又便りを沼ていゆ。結城里見の両君臣を。誠ーと酷ーく。堅
削が已ゑ従ふて。ゑの地ゑ來ゆと孝順とゆひ做ていゆ。而ゆ。
ゑの後又改元ハ。堅削を召近着て。夜話の陪堂ゑ。ゆくりけ。抑改元が法師をそて陪堂ゑ
まゆハ年來外法と修されべ。ゑの故ゑ政元ハ敢女色ゑ親まむ。然ばゆそれ啓事ゆ妻を
ゆく子もあーれば。政務の暇ゆ折の樂種ゑ做ーと。今出川亞相入道義視卿の弟。の妾
服の姫上の其名と。雷吹と。喚れゆハ母と賤ーかれば。御子の内ゑ數まゆられゆ。その母の
皇方ゑ寵ゆく。在ゆ。改元貶て養ひとそ。已が女兒ゑ做ーまゆ。若の女房。名ゑ狩冊
容止ゆ。深窓の下ゑも。鞠艱せゆるが。今茲ハ十六歳ゑゆ。ひけゆ。然ばハ這姫上ハ容止の美ー
紀を三月の花ゑ擬ふべ。又肌膚の清ゆるハ仲秋の月ゑ似ゆ。一さび笑ハ城を傾け。二さび笑ハ

復六怡悅に堪ず。宿所に退くて件の便宜を徳用に耳元に示す。當晩俱して參りて改元則徳用を閑室に召入れて。先茶を賜ひ果子を賜ふ。僧復六が密訴の趣且結城宗とありとかたの事の顛末を云云と問ふに徳用い父に告る那佯誑ふるを再按の趣を盡して演て。結城里見を譖ると酷く言果て又ふ曰ふ。他門が逆謀い偽りなそいまだ證據を沼ざれども天に口なし。人をして言あるとは古語あるべ相違あるべもいなぞ。倘一葉ゆて斷ざるべ斧を用るの患ひあり。鎌倉の両管領へ征伐の表を命せられるべ御後悔を後へ。この表甚麽と哄誘せば政元一霎時沈吟して。和僧の意見も所以ふるに有るべ応仁以来諸國乱れて陵夷皇都に逮びに干戈盛く理りて都鄙皆安堵の今に至れり。開と呂風聲に據るのみぞ。結城里見を征伐せば東國是より又乱れて民復塗炭に淪むべ。徒れば征伐の一條い他門が旗を建るに及びて是を伐つとも遲くぞ。姑且度外に措んのみ。和僧の上を我が與に乳兄弟の因もあれば。いざ皇都の大刹へ移轉の便宜を計ひて。時を待てそうあれと慰られて徳用いかひかりと思へども。犯て諫ん実事なるべ陽に寛仁大度と稱ぞ。餘談に短夜深ふけ。是より後も政元い時々悄地に徳用と召よせて。下總上總の風俗人氣の好ずを尋問に徳用是に又便りを沼ていく。結城里見の両君臣を譏ると酷く。堅削が已に従ふて。その地に來りて孝順と呂ひ做ていくぞ。目とりけさせぬと呂管蔓め稟あるべ。その後又改元い堅削を召近着て。夜話の陪堂ゆ。そうけ抑改元が法師をして陪堂に。年來外法を修されべ。その故に政元い敢女色に親ぶ。然ばそれ啓事ると。妻を。なるべ子もあるべ改務の暇ある折の樂種に做べ。と。今出川亞相入道義視卿の義政の第二の妾服の姫上の其名を雪吹と。喚れぬい母と賤しかれば。御子の内に數まられぬ。でその母の里方に寓居して在るを。改元聽て養ひとして。已が女兒に做べ。まあ。せ老若の女房。戒名欲冊傳て。深窓の下に。鞠艱せるけるが。今茲に十六歳に成るぬ。ひけ。然ば這姫上に容止の美。紀を三月の花に擬べ。又肌膚の清安るい仲秋の月に似る。一たび笑い城を傾け。二たび笑い

困を傾ると唐山人の物に寫あれども。惜むべしヨヲ病ゆえ。常に重債の患
あり。うち臥すこと多く日も屏居てのみ在れば。改元以来。與に甲乙と對を擇むに意に
稱ふもあらず。且ヨヲ病る故に産可の折をもるべし。有徳一程に雪吹媛に給事まる女房
們。頃者徳用堅削が夜々君侯の倍堂に召れて加持法驗の灼然なるを問答しけ
言の趣をうち知りて。うち聚合て商量まるに。那師の坊と申すは。香西主の家子ゆえ相公
と乳兄弟なる因さあるといへば。姫上の病者に加持を凭まば驗あらんと云女流の衆議
一決をければ冊傳の老女房。件の衆議の趣を復六に告て願禀まに改元素より修法を
好めば。彼一とも許りけ。さてとりて徳用に雪吹媛の持病の發る毎に堅削を領て。その
寢所に近づけて加持して徒夜と守るのみ驗あらべもあらざれど。呪法の暇に折に堅削が江
湖の浮談して。女房們の笑ひを取る唇のみと薄ければ雪吹媛さへ慰められて。保養の一助
みやるべしけれども。虫積ちまく癢りて結髪まの日もあれば女房們い感信しく。只是徳用堅

削が法驗をるに。改元も亦歎びて。隨即件の兇僧師徒に布施多く取せられ。少く信
愛まるるけ。小程に秋八月に至りて。安房の里見の使者大江親兵衛仁蛮崎十一郎照文と喚
做せる貢調の金銀と土宜を幾韓樓に獻て。水路を泝り京都に詣て。里見義成の
家の勇臣八個の犬士の氏と姓を請ると。守護の德用舊怨に堪難て。肚裏に思ふやう。
曩に我結城城を。那犬士們に虜にせられて。能化廢院に在り時。他們が衆談内談にうちの
姓名さ人と為りさへ。側聞して具に知りぬ。我身一旦生拘られる。寃家に大塚信乃ぞ。大江に當
敵るわれども。那奴に左右川の上ゆ。長城枕之介と。數を走りて。大を拯ひ。嶮阻に兒れば怨を
俱に寄せ。今我が這里に在ると知れば。死地に入りて妙るるを。默算屢く定りて。先堅削に
意衷を示して。その後父に密談まる。有一宵情地に改元に件の意趣を告ていやうは。知
召れぬ。今番里見が使に達て参上たる那大江親兵衛に猶身宇宙に倚平る惡少
年ゆえ。抑里見の勇臣に犬をして氏に成せる者。甲乙都て八名あり。就中那親兵衛に年少

たゞ武術に老たる修煉至妙の段あらはれて今茲の夏四月結城より程遠からぬ左右川の上に城主の忠臣長城惣利が一隊の士卒と叙ゐて剣人馬共倒れ擒抓て川へ放下たゝ本事に拙僧見て知るゆゑ然ば里見が叛逆の計較へ則是八犬士の帮助あるゆゑ寧今那親兵衛を討て罪に陷れて結果げめ」ひろ。義成に憶りるゝ隻眼と挑れ心地して勢乙是より撓むべし。毋く討せめ」ぞ御後悔りそいろ。悄めて連りに麾めて已頭を掉て」と改元吟て頭を掉て和僧の意見然いもあるべし。今とて里見の謀叛に偽はるゝ証据なし。今見る所角所に忠臣ゆゑに上を敬ひ禁裡並に将軍家及我に至るまで貢進の礼漏る者なし。士の姓氏を請ずして計さぞしてその使に罪を負て誅戮せば東国の諸侯解體して。いよく武命に従べ」ぞ是を思ひ。とられて徳用歎息して人の及ぶ寛仁御大度然まで思召さるべ姓氏の一義を許して副使を返し遣て親兵衛をのゞ抑置て京師の王に做へ」ぞれば里見に折損あり虎を放ちて山に返さ。婦人の仁に似るべ

くゆゑ」ぞ憚るべく猶幾番も賢慮を旋らしめ」ぞと。啣言まく術と易る毒氣煽に傾れば。改元沈吟て且領ぬ。我も亦那犬江親兵衛が少年にして大事の使に達られしとなく。必是俊傑なるべ」と猜せざるゆゑに然いまで武芸塾男力の千萬人に敵するとも本事に信に易くぞ。卒然ば将軍家の台命と唱呼へく他を我邸に移て留め這頭に名無る武人力士と試験ば成の勝劣に儘して後に進退せ然ば親兵衛が本事あるも衆敵に堪ずして開里に命を須臾にして只是自業自得ぞ。里見も然るに由るに倘亦親兵衛が本事に如くに衆敵を折に足らぬ実に蓋世の豪傑に小ら実我里見に高禄して家臣せ孰の方にも損ぬ。任ての説に儘せかゝと解れて徳用尚飽ぬも用ひられぬ優ぞ。われ甘矢ひの額衝て賢慮拙僧とも服仕ぬ然ばその試験の敵に拙僧とも加えぬ。ね縦昔の牛孫九曽我五郎に十倍とも人に譲るべく思ひぬぞと。誇れば改元笑頷て。開その折の時宜に秘よ秘よと口を鉗めて當晩の密説果けり。恁而改元計ひて親兵衛を安房へ還さぞ。他が宿所を徙ぬ逮びてその伴

ゑく武術ふ老る。修煉至妙のる段あり。ひそとして今茲の夏四月結城より程遠くも至る君川の上ゑ城主の忠臣長城惣利ゟ一隊の士卒を率ゐて。剰へ人馬共倒ふ撥抗て川へ放下ゑ。本事ハ拙僧見て知り。然ハ里見ゟ叛逆の計較へ則是ハ大士の帮助あるふ。寧今那親兵衛を討て罪ふ陥れて結果けゆ。義成ハ憶りるく隻ゑと挑れ心地して。勢ひ是より撓むべ。ゑく計せゆ。忠臣御後悔ゆいひむいひでくと悄めて連りふ麾めて已ざりしと改元听て頭を掉て和僧の意見然もあるべ。今ゑ里見の謀叛ハ偽ふ。ふ。ふ。證据ゑ。今見る所角所ハ忠臣ゆ。ゑ上を敬ひ禁裡並ふ将軍家及我ハ至るまで貢進の礼漏れる者ゑ。士の姓氏を請ゑ。計さぞ。てその使ふ罪を負て誅戮せゆ。東国の諸侯解體。ゑ。ゑく武命ふ従へゑ。ゑ。是を思ひ。ゑりとゑ。とられて徳用歎息して人の及ゆ寛仁御大度然ゑ。ゑふ思召ゑ。ゑ。姓氏の一義を許。ゑて副使を返。遣。親兵衛をゆ。抑置て京師の土ふ倣。ゆ。それゆ里見ふ折損ゆ虎を放て山返ゑ。婦人の伝ふ似るべ

くゆ。ゑ。ゑ。ゑ

當を遠離へ伴當ゆも亦勇卒智者あそ。這方の機密を洩さゞる主を資助て脱去るゆ
もあるむと。陽そ。儀のどくふ討ふ程ふ門子们ふも。悄地ふ下知ゑ。親兵衛ゞ伴當の市店ふ在る
代四郎ゑ。主の安不ゑを問んそ。求めるを緊ゑく制めさそ。決て内へ入れゞるも是ゑの密意あ
れゞ。這時侯又徳用ゞ獨悄地ふ思ゆ。我ゞ主君をゞふ。萬ゆ稟して。那犬江親兵衛奴を夙く
結果んと欲へふ。主君慥ふ遠慮あそ。その事思ふ如くふゑゞも。それゞも試撃の計ゞ是切てゆ夏ふ
ゑ。那奴ゞ命を断へゆ人ゞ。ゆせて我ゆ裏ふ在ゆ。怨を復さんとゆ時ゑ。みゞゑ負へそ父復六ふ告て猛
可ふ京師の鐵匠ふ鐵の鹿杖の重六十斤ゑ。大きふ作り出さて。准備ふ整ふ程ふ亦復思ひ
旋へ。ゆゞ京家の武士ふ武藝勇悍。親兵衛ゞ敵ゆふ足る者五六名ゑ易へそん。是加へふ我あ
ゞ。萬ふ一も失へゞ。思ゆ。ゑ味好ゆ。晨ふ左右川ゆ。那奴ゞ掙へ遠目ふ相て。ふ目覚
かへふ況能化院の三ふ隻ゆ。撃ゆ如輒ふ推倒さゑ。ゆ力祫と云恰と云侮ゆ。ふ大敵ゆ
勝負の時の氣運ふ在。倘試撃ゆ折御内の諸勇士我さふ不測の失へゞ。主君必親兵衛ゑ。と

惜へ愈放さゞ高禄とゆ。家臣ふ成ん倘その田地ふ造へゞ。鄙語ゞ賊ふ糧を藉ゞ一期ゆ
ふく。ゞれひ。うみゆ。不覚何の日ふ怨を復さゞ危へ試撃ゆ目ゑ。ゞんとゑ。夜ふ紛れて那奴ゞ宿所へ潜入ゆ張寄て。只一
刀ふ結果ゆゞ是第一の捷徑ゆ。後の患を除へふ風ゑ。鳴呼介也。と。肚裏ふ再四の主張決れ
ども。父復六ゆ秘して告ゞ。堅削ふゆ。意衷を示して。其次の夜更闌。時侯堅削を伴ふく
悄地ふ親兵衛ゞ宿所へ赴へふ。各掩脛脛衣ふ身を固め。戒刀を腰ふ跨へ。烏ゑ巾ふ頭を裹へ
雙眼ゆ。ゆ。貫ふ頭へ布の絺附へる戦鞋を穿へ。准備ふ毫も透ふ。既ふて親兵衛ゞ
宿所ふ近へ。塀を踰へ。庭門ふ潜へ入へ。壁を穿へ。内ふ入へ。他ゞ臥
房へ那里ゆんと思へ。左右へ。找難へ。坐席の障子ふ舌を。濡へ。細ふ穴ゞ穿へ。奥の
方へ。窺覗へふ。豈憶へ。親兵衛ゞ臥房と。ゞ。隔亮の這方ふ。究竟ふ士卒十五六名。食客
械へ。側ふ引着へ。端然へ。夜へ。成へ。在へ。あの義ふ徳用堅削ゞ。ゆ。ゞ知らゞ。所へ。改元い
肇へ。倘親兵衛ゞ機密へ。悟へ。脱れ去る。宵のゆ。ん。ゑ。悄地ふ。究竟の精兵十五六

名を夜毎に他が宿所に遣りて他が枕に就くに及びて臥房の邊を成すと一宵も間断あらぜ天の明るんとする比及ぶ悄地に生くべしとぞ親兵衛は是を知るぞ況徳用堅削を思ひかけざる事の光景に呆れて頭を掻まぞに計較虚ありけるこの夜只得退去りしが猶幾番も出て張つ成兵の陰るぞやと思ひて又虚負して両夕を経て又潜りし陰成の士卒ども朝親兵衛が宿所の庭の板屏に人の泥脚の跡印して壁さへ毀ちて必定大江が伴當に同児の術をなる者主を帮助て食をくんとぞ潜びあるゆゑあらむぞ倘奪れば我ども後難孰か免るべき今宵も人を増て外面をとて成るべくれと大家風く商量を果てその成の地と易られども親兵衛に知れんと憚りて物の音もせぬ咳だにもせず袖に包まて悄々地に宿所の四下を回るに時々うつらつら而る夜行に閑あるとなければ徳用と堅削とは遠べも近つけぬ何れば躬方の與に恁まで妨げぜるやら是に世の常言に難言に刃と借まに似る鈍や朽惜し便るべ。とうち嗟くのを術なければ又阿容

阿容とかて去程に徳用に曰く中。今は思へば刺客の術に心達に所行ありて男者の本意にあらぬ。暫且他に命を貸て試毀の折に我一棒を喫して往生を遂ん今宵に限るとうべ堅削點頭て然に師父の効力武藝に過ぬ親兵衛の上に出る最晴やる試毀の折怒を復しめんと潜び寄て寝首を捕るより猶愉快くいかんと慰められて徳用に尓云ふ勿論々々と悄然のつる減らぞ口労して今宵も功なく死きに脚さへ疲らて已が宿所へ還りけり。抑這武條の顛末に秘密の中の極秘なれば人の知るべきにあらぬけん誠に哉古語に云ふ隠れたるより顕れたるなし。聲外に聽え雲に路鳥を虚して飛ぶ時に識られ獨悄地に做といへども必定已に起る時其機必先動く現隠慝の洩易く怕るべく慎しべ。間話休題然に紀三が大部屋の毎の噂に因て少知るる件の秘密の言の趣徒らに詳に蛟とのまで至りて其崖略を聞きしに心悄地に驚嘆憂ひていで這を大江主に告る便り欲得と念程に親

兵衛の隷僕門に夜こそ人の出入ふ憚らあれ書の忌ぶ者多く頃者未曾餅師が軍書の諳
讀妙なと人の噂ふ知りてその餅の價いと廉くて然る一藝さへあるゆゑ我も買へ皆買
ねとそ来ゐるそもそも招よせて餅を買ふの尠らぬ然而太平記を听んとそ大家請ゐ已ざら
け登時紀二六ら這里と親兵衛が抑置る宿所ゆゑと豫ら知らざるふ便り好と思へ亀も舞ぶべく非如
對面の便宜と泛ぎとも切て今我来ふけるを知さまゐらるふ便り好と思へ亀も舞ぶべく
太平記巻の四上正慶元年の春笠置山の官軍敗れて後醍醐天皇隱岐國へ迁されを
あの時備後三郎高徳が行在所の櫻の幹へ詩句と寫ゐ一段と聲爽ふ諳讀者
るゑ大家ひとくらち呼くふその書ふ道ら其比正慶元年春三月備後國ふ兒嶋備後三郎
高徳と云者ゐ主上後醍醐天皇笠置ふ御座ゐ時御方ふ參ぎて楊義兵ゐ事未
成先ふ笠置の被落ゐと聞ゐ力を失て默止ゐ主上隱岐國へ被遷ゐを給と聞て
無貳一族共を集めて評定ゐけゐ志士仁人無求生以害仁有殺身

以爲仁とへらいざそ臨幸の路次ふ參り會君を奪取奉ゐ大軍と起し縱ア戦場ふ
曝もとも名と子孫ふ傳ん申けれ心ある一族共皆此義ふ同ぜゆゑ路次の難所ふ相
待て其隙を可伺と備前と播磨との境ゐる舟坂山の巓ふ隱れ臥今やと待ら
ける臨幸餘ふ遲ゐけれ人を走ゐ是を知ゐ敬言固の武士山陽道と五經播
磨の今宿より山陰道へかり遷幸成奉りける間高徳が支度相違しけゐ
美作の杉坂とそ究竟の深山ゐれ此そ待なゐんと云石山より直達ふ道も高山の
雲を凌ぐて杉坂へ着ゐけれ主上へなゐ院の莊へ入せ給ぬと申ける間無力此より散ふ
ゐけるぶ如何も此所存と上聞ふ達せゐと思ける間微服潛行して時分と伺ければ可
然隙も多けれ君の御坐ゐる御宿の庭ふ大ゐる櫻木有けゐと押削て天莫空勾
踐時非無范蠡御敬言固の武士共朝ふ足を見付て何事ゐ何ゐ者が書
たるやゐんとそ讀ゐて則上聞ふ達けゐ主上へ聽て詩の心と御覚ゐ有て龍顔殊ふ

太平記巻の第四備後三郎高徳櫻樹ゐ詩を題ぞる處
けいこの武士

天草
たゆうの

御快く笑ひ給ひ。以上太平記と一字も差違ふ謬なく流るゝ水の委ねるに如く。聲高らかに誦しければ。大家堪ぬやヤと喝采して一霎時徒然を慰めけり。有徳けれども親兵衛は静然として奥に在りまとまとべてもちあひたよ。

連帝戸偏て餅師が讀む太平記をうち聞くに。他が心を推量るに我今這里に抑留られて楚囚に異ならぬを懸念は最も惶恐昔後醍醐天皇の隠岐の離宮に屏居られてこうまきける御悒苦を思ひ比べと知るとて高徳が楼に寫せる詩句の一段を讀るるめ。小らば那身を高徳の孤忠にみづから擬へ狹れるに因て悄と身を起して偷見るに果してその人なりければ讀果て折一個の若黨に這宿所に隷られるを召よせて却に今来て在る餅師狹思はも似ぬ記憶の好さよ我も亦憶りるに重帝戸偏まうち聞く。俱に徒然を慰めら然る經紀児の餅をらべそれ行後の話柄に喫べ試まく思ひて却味ひ甚麽ぞと問へば隷若黨微笑て然ぞ。餅は則節餡ぞ味ひ凡庸ぞれども。價極めて廉ければ。鄙語に得要東西にの上やいなとうちく呵々とうち笑へば親兵衛も亦

うちに笑て小らば我は好きに最上の餡を内に龍る形は圓くも長くもあれいと大なる餅を五六個買まく欲と然ともその餡或は微く或は又凡庸ぞ深く心を用ひられば我口に稱ひて之の美ぞあるるでよく做せるべ明日のて来よと。誂てよヨヌくに要るー五枚でよりと小に隷若黨ぞうるて退出て躰て紀二六に親兵衛が誂ぞ箇様ぞうと吩咐て奥に在る客人を安房の里見の正使ぞ大江と喚做せる後生ぞ你が記憶妙なれば更に還て話柄にせんぞと買ぞ餅ぞ明日に必のて来よと。諭を待ぞ紀二六は既に親兵衛が隷若黨に吩咐る折聲洩れて。

ぞ安くうるるるーーーば只河唯々々と応へ賣竭ーる販樓と搭駝に還る通途左さま右さまの思惟るに。今日大江王の誂めし。餅は必所以あるべ。と心づてもその所以を早に悟るに才足らぬ那隨涙碑にもねども考べ幾町狹にくも覚ぞ五條る客店近くるー時ぞう。

深く思ひるてけれ心悄地軟勇ぞ儘例の向先走り奥て倦々と件の餅を誂て翌と数ぞ。

歇店に還ぞ。湯に浴り夕飯を喫果るる同歇る客經紀们に手枕に就れ單紀二六る

孤燈の下に墨斗の筆を援ぎて最細小なる紙に徳用堅削なる密懇説言の事の趣且改元の将軍家の台命と伴して親兵衛を返さざるべけ。奸詐邪謀の顛末と近日京家の勇士仗と試撃るべしとの風聲まぞも漏さとる。細書まる者五枚可所と猶小く畳分く。准備既に整ひ燈火弗と吹滅して枕に就るど明日の便宜を思ふの故にその通宵寐も睡られず。次の朝の毎の風例の販子賣買まる餡餅の円丸許赴て昨誂へる巨餅と毎に粥常く餡餅をヨヲく買合る販榼に藏ていそく這里を立去て人多地方に赴絶。自剃の為に貯る剃刀とりく巨餅を都て両箇に裁劃て内る餡と合に乗て准備の細書と一箇々々に籠て斫口と合まる携拵へく程もなく尚煖る餅を祈口愈て迹見えず。噫我ぐるとと思べ獨らに失れて又販榼に藏め復搭駝て改元の郎る親兵衛ぐ宿所に赴く程に秋の日暮れば短くて已牌ぞる時紀三六に背門より高く呼内く。隷僕們に報る。昨日東の御客様の仰付させる餅を持参仕る。

豫より知食べ近曽の新製なる米饅頭と喚做る。殊に大なる仕る餡に仰に従ひく。実に心と用ひ薄皮にく其味妙にいくく餡に取りしぬ。みづから竣りしぬる骨折甲斐もいひ。ぬのより一寸ばかりとなる隷若黨ぞる卒然ぐ其餅を是へく。果子碟と少く拭に濡布巾埃目残る漆盆に載て遞与せば紀三六に菜箸とりく米饅頭を碟子に装る者才に五枚その傍に凡庸る餡餅を装添て是を隷若黨に示て這餡餅に鹿物なく。御用の外にいへども喫べ比べのいとび米饅頭の意味深なを安定に知ぬ。進らせるのひとに隷若黨點頭く。件の漆盆を抗るべ儘奥へりくやく程に親兵衛に庖湯の次の間る縁頰に站く。庭に長視て在りしば今紀三六ぐいよりの戻に具に洩ぬ。既にいろ〳〵汚りしば隷若黨ぐ告ると答ぬ来ぬるとの戻に好く。餅師ぐ口状に這里も詳に学ぶとりいでくとりいでも常居る坐席に返り坐に先餅を見て含笑て現大なるも為れるる。彼の侍衆

隷若黨ぞ我思ふ。今日

那經紀兒がりて來たる餅を餘さず買食て。各ふまあ〻せんの美を計ひのひねとらふ隷若黨欺び美て退出さく甲乙ふ出て餅を買食る程ふ親兵衛悄地ふ指そりて米饅頭を推試るふ果しく内心堅ければ東西有りけりと猜しる肚裏ふ思ふ。昨日紀二六が方へ來て太平記を諳讀あけ。備後三郎高德が桜ふ寫ふ一詩の一段を必是悄地ふ我ふ告まく欲ふることを知せんとての所為ならんと猜しふければ我も亦昔唐山の大紀る。鯉魚を解く。その腹より一書を獲り。故事を思ひ出つそれとなる。ふ餅の内ふ密書を籠る。計策を論ずる他とく悟りそ我がろ。沿えふ怜悧かりけりと感じ心ふ称る程ふ。隷若黨が遽しく又來て親兵衛ふ報ふ。方僅仰られ。どく餡餅を比百買食て其價を問ひしふ米饅頭の價と共ふ五百文ふ比べ金ふして貳分ふ。とひあたまりふヨヲくいいむ。とりて親兵衛字ふ。否とよ我憶ふ。這里ふ止宿を程されて各の厄會ふ做ると既ふ久しけれその徒然を慰る為ふもがる。と思ふ。だりふ進らまる東西るふヨヲ決して敷

ろ〻ぞ宜く分ちく茶消ふ去の〻我も午後のふせんとりつ件の米饅頭ふ袱児をうけて後べ方ふ袋戸開て藏措く却客硯の下布る小紙裏を含ふ。封ふ儘ふ推試好。行裏を用ふぞとも這金ふよ貳分ふれば隨即餅の價ふ足れりとりつ筆を掻含て餅の價金貳分と寫着て若黨ふ卒とく遽與して又いふ。ふ徒いで何と云ふ。敷言ふ似ども各軍記を听んとて日毎ふ錢を費して餅を買んい要るを知る如く。將軍家ふ命ふより抑置る我宿所ふ遊戯ふ庶ふ娯樂い憚りあるべ。ある各の上ふ。我が謹慎の所以られども然べとく餅を買ひて那經紀兒を近つけて。賢達ふ折ふ我も又餅の欲ふ日もあらむ。両三日と隔て來よと吻咐のふ。ふ胸ふ憑むりとふふ隷若黨感服して。御教諭兼りふ現堂當門上ふおさる両個の小吏をいふ。頭ふ小心仕らむと。応て退出て。却紀二六ふ件のよと告示して。餅の價を還せば紀二六受含てうち戴く販樞へ緊と藏く答る。ふ。御諭の言の趣ふ。ろ〻ぞ

亮然こゞ今より隔日ふ又そ参りひゐぐ御用ちゃくと諄返しつ販樞と背ふやとく馳
做く御庇ふ因てち御一所ふて賣買をく做果へれば退りて休足仕らむ吁忝なのうゝと
宜く稟ーぬひゐと腰と屈めつ人々ふ告別しつ出くゐくと大家ひとゝくちゝへそその賣買ふ
脱落ゐくて老実ゐると誉ふけり。介程ふ紀二六ちその日歇店ふかへり来て親兵衛ゐ取せる。
金子の裏と開てみんと思ふ心のいそゞれて販樞の蓋掩合て見れば餅の湯氣籠りて内濕
ゆる樞ゐれば裏ー金子の紙濡れり开を破らゞとて。臂近る。火盤の埋火掻起しく。裏
紙をそぶ儘ふ火ふ殺羽ーつ。うち返しつ。炙るまふく乾ゆる。裏紙を解ゆ開けば。その金貫分
ちりヨヌくをそ。方角両個つ。思ふ包まそ一両あり。加之その紙ふ寫ゐー数行の文字ありて。
炙画の像く顕れけり。何ふまゝんと訝りるぶう。押へ伸あてよくゐれば直塚ふ示ま事汝ゐ諳
讀の太平記高徳ゐ詩句の支我ふ告まく思ふちゝ。ある呼以るゝんと。猜ゐーちゐ。我ふ題書の
故事ふ擬へて。餅書の秘策と教えーと悟らば必做まゆあべー。ゆちとて屢せば竟ふち馬

脚を露ーて人ふ知らゝ禍あらむ。小事ハ我ふ告ぎもあれ大事ハ餅書の密策も猶又一
度ハ允せべー。且姥雪ふ告まくもとも他ゐ歇店へ色くべりゝぎ。汝ゐ主ふ従へゐ。その地ふ在りと
雖兵伴當ゐ。疑ひ問ゐ。恁々と告ぎると。ゐるぎべー。夫計ハ密ゐると善とも。躬方とふ
とも少知る人のヨヌ法とゐハ洩易ゐ。慎えゝゝ古歌ふ云ぎを。あふのを阿漕の嶋ふ
ひく鯛の。びゐちゐるゐ人も知りるんとありーと。紀二六屢讀復しく。且欽び且感る心の
敬服大々ゐるゐぶ。先その金子と合ふ藏め又その書と推固め火盤ふ投煙ふ做しそゐと
又紀ゐ思ふ。ちゝ大江主の神々ゐゐハ今ふ創ゆゐ。昨ハ餅書の計策とそれとゐゐ我ふ
誨えく。秘密山と告る便宜と泡さ。先今ハ赤酒をりく。意見を寫しく敬言る。現素
紙ふ酒とりく。画まれ文字まれ寫とゐゐ。尚素紙ゆく左えかゐゐ。开を火ふ殺羽ー炙るふ
逮びく。寫る限ゐ顕るゐゐ。世の人の知るゆゆく。新奇とゐるふ足らねども。時ふ取ハ遠
慮精妙。生年九歳の童ふーて。よくゐの田地ふ至らゐ。実ふ資る神在さぶハ誰ゐ企及

ぶ兄今こそ恁い心もたけ。我い這酒書こるよりと兎毛だるりも悟くぞ知らぞ。只這紙の濡たるを。炙るゑ及びて憶ぜも文字顕れりハ自然の感応是も亦護らせるゑ神の冥助欤人力人智の及ばぬまでゑ奇之妙之是ゑ就ても犬江主の餅書と酒書と互ゑ来る。餅酒の照對新奇ぞ。人意の表ゑ出るとハいま一。刈亦餅の價と。まざいくとも知るよ。亮時先金壹両裹措てその夏寡貳分と呼くゑ及て貳分と寫ゑて壹両金とぞ儘ゑ遞與され。臨機応変智慧廣天世ゑ八犬士と稱られ。八彩和漢ゑ抜萃こるハ以あるゑと一唱三歎ゐく憑ーく思ひけり。

第百三十九回　五條の頭ゑ代四郎宿憂を啓く　殺る剣の場ゑ親兵衛武藝を見る

その日紀二六が賣買を果て。五條の歇店へ還りハ。毎よりもいと早くて。尚未牌時候なりけ。歇店る客經紀们も生活ゑ出て四下ゑ人る。紀二六を是も亦折ゑの便宜ゑられ。架ゑる木枕今ゑ下ゑく。臥く思旋らまゑ犬江主ゑ仇敵を兎僧那德用们が詭詐奸計の顛末を既ゑ主ゑ告られ。然るゆそも蛟雪主ハ有恁る椿事を知るよりゑけれハ那上をあらゑゑく。と思難く在るんぞ。然がとく那人達の歇店へとそハ急ぐ。

三條五條ハ程遠く。同じ河原ゑ在りるゑ。我這歇店を知らぞ。便りるゑを薄情けれと思ゑのこそ術るけれハ。次の日ゑ亦夙く。改元の邸ゑ赴て。大部屋小部屋の毎ゑ餅を賣れども軍書を講ぜぞ。強て求る者あるくも事ゑ假托け免れて。只江湖上の雑譚ゑ。聊笑ひを取れるのを。親兵衛の宿所へハ。三日ゑ一ど赴て。隷僕们ゑ餅を薦めて賣る日も買れぬ日もあるけり。紀二六が恁猛ゑ。賣買の趣を易く事情ハ鄭ゑ親兵衛が驚を思ゑ。ゆゑハ聞果くゑ。告ぶるゑ告るゑ故の儘ぞ。慎まぞハ餅師ゑ相応しかるゑ。軍書の諳讀ぞ。るとゑ。噂いゑく高くゑんを。智ある者ハ疑ゑて。後の障りゑるゑるゆせと。阻む遠慮あれば是よりて又三四日經く。紀二六が例の如く。餅を賣竣しかるゑ。五條の橋の頭ぞ。料ぞも代四郎が前面より来ぬるゑ逢ひけり。迭ゑ何を什麼。

先四下を見廻まふ這時下晡ゆく。路行人の稀なるに。河原ふ老る柳あれば。倶ふ其樹陰ふ立寄りて。土坐ゐ羞るを祝ふ祝さる。代四郎ハ恨ふ面色ふて。直塚和郎ハ思ふも。仮ぬ心つきる。人ハ。曩ふ咱ハ大江主の安否を問ふ。那邸へ赴ふ門子ハ推禁めて。木牌をけれ。とく許さ。和郎と索めて那木牌を借んと尋思ふ。きども。歇店を那里と知れば思ひのままて。開も果さず。今日ハ音耗せるる。秋明日ハ来て那里ハ動静を報らゐ。秋と。不娯。秋も九月中旬ぬ。早暮ふ。欝悒ど。然てそと査ゐ。餘ふ胸の休ゐねば。和郎の歇店を那里とハ。今ハ知るよしもなく。洛中洛外二三里ふ。遠くハあらず。卒然ゐ索ねて。ゐと。又尋思ふ。漫然ふ。今ふ三日ふ。ゐ。亳も便りを。ゐ。ゐ。又徒ふ三條ふ。歇店を。投てかの。這里ふ。逢ひ。ハ幸ひ。ふ。和郎の歇店ハ那里ふ。和子の安危を知られ。秋ハ。ふ。急迫く。向て已ざり。紀二六禁めて。且ふ。ゐ。ゐ。四下を見ゐて。聲を低めて。然ゐ。ゐ。曩の

恨ふ理りを思ふ。ふ。ハ。今日まで音耗せざ。ハ。秘密の事由あれば。却小可ふ。曩ふ犬江主の教を受。その宵より。この川の前面ふ。某甲と。飯店ふ在り。餅師ふ打扮て那木牌をもて那邸へ出入自由をゐ。ゐ。ゐ。

ひへふ那邸さへふ那邸へ出入る便宜を失ふべしよく思つぞい後悔あらんと諭せば代四郎つらくと听て憶ぜ大息を吻く。原来這回の禍鬼い那徳用ぞが所為なり。狡幸ひあらば犬江主へ今猶恙なりとへども。他们が毒計已とに至るい。嗚呼危ふかも殆ふ仮へ。乍麽いふて可らんやと問へば紀二六沈吟まて事情を思惟ふ徳用が詭詐毒計施さぎとふとるも。幸ひふして改元主ハ試験ぞと宗として。その餘ハ徳用が薦る邪計をヨヌく取らぎと。尊ふ少けば那人の底意犬江主の人柄とその武勇を少知りて。悄地愛まる故なるべんからんあい大害を加るといあるべくば。かからば友て安ふ似くと。解れて代四郎黙頭てそれを思ひ合まるるーあり。始我船浪速津ふ着ゑ。折犬江主の指揮ふより。咱们先這地ふ来く。世の風聞を拷听ーふ京師を殊ふ男色の行はるとと女色ふ勝まり且政元主ハ夙くより。悄地ふ外法を行ふ故ふ正室側室あるとなり。と豫少けども。弘法以降龍陽調戯ハ法師ぞ。許もとへば木犀花をのと。改元主も忌ざるべ。かからんあい然までも。犬江腋子と抑措て頑童ふ

せまく欲ぞる故ふ弥勒の世まぞふ放ちく。安房へ返ぞ旨あるべくぞ。疾ーー癬ーの境ぞ。開も亦後の障ふるべんと。とへば紀二六含笑てかの意ハ料りかさけれども。犬江主の神々ぞ臨機応変の才匠ーかるべ。縦其頭の情欲ありとても免るとと易るてんそれらも猶危ふかべ。試験ぞの沙汰あれども。犬江主の本事をりく。失あるべうもいらぎ。ふの毛も心安ふ仮へ。寔ふ今日ハ料らぎる。遭際の長談脩話ぞ。憶ぜも日の暮れば。宿所へ伴ひまるらせく。餘談を聲ぞまく思へどもいふぜ。我歌店ハ客経紀们の合歌るまば。側ふ憚りいとヨヌくろ。倘又異日小可ふ逢まく欲ーぬるふ朝まれ夕まれ。這橋畫処ふ鴻立く。我賣買れ毎の去向帰路を告ぬ。対面輒ふ仮へれと。諭せば代四郎黙頭て。好々その毛もあるべ。嘻和郎ハ陪臣の若黨ぞ。惜ゑ才子ぞ。開と犬江主の見出て。今番の大事ふ使そる。那眼力も。亦ふくて。和郎倘ふの地ふ来て在くぞ。我豈那里の風聲秘密ゑ。恁具ふ听くぞ具ふ听くぞふんや。寔ふ珍重々々と誉れば紀二六頭を擡く。恁いらば今ゆふ回正く

小可さへ那邸へ出入る便宜を失ふべし。よく思ひぞ後悔あらんと諭せど代四郎つらつら聞く
憶ぜ太息を吹く。原来這回の禍鬼は那徳用ぞ所為なり。弥幸ひあらば犬江主へ今
猶恙なりとのべども。他们が毒計已に成るを嗚呼危しかも殆ふかべし。乍然いふて可らん
やと問へば紀二六沈吟して事情を思惟るに徳用が詭詐毒計施さぎとなるとも幸
ひ。ふして改元主は試毀を宗として。その餘は徳用が薦る邪計をヨク取らぎと噂ふ少
けど那人の底意犬江主の人柄とその武勇を少知りて。悄地に愛する故なるべし。かゝらんかの
大害を加るといあるべくば。かゝらば反て安きに似たり。と解れて代四郎點頭てそれも思ひ合せ
るよりあり。始我船浪速津に着して折犬江主の指揮ふより。咱们先這地に来る。世の風
聲を拷听ふに京師を殊に男色の行はるゝと女色に勝れり。且政元主は夙くより。悄地に
外法を行ふ故に正室側室あるとなり。と豫少けども。弘法以降龍陽調戯は法師より。許
もとへば木犀花をのゝ。改元主も忌ざるべし。かゝらんあの戯までも犬江腋子と抑揖て頑童に

せまく欲する故に弥勒の世まぞ放ちく。安房へ返す日あるべくぞ疾く癩の境を開も
亦後の障にあらんとのべば紀二六含笑て。かの意は料りかねども犬江主の神々あれ臨機
応変の才匠かねば縦其頭の情欲ありとても免るゝと易りてんそれとも猶危かるべし。
試毀の沙汰あれども。犬江主の本事をよく。失あらべうもいかぞ。その我も心安からべし。寔に
今日は料らずも遭際の長談俗話を。憶ぜも日の暮れば宿所へ伴ひまゐらせく。餘
談を殿出さまく思へども。いかに我歌店は客經紀们の合歌るまば側に憚りいとヨメろ
倘又異日小可は逢まく欲しのひるべ朝まれ夕まれ這橋畫処に鳴立く。我賣買は出る
毎の去向帰路を告る。対面輒ふべれと諭せば代四郎點頭て。好々その我もあるべ
ふ。嘻和郎は陪臣の若黨は惜に才子に開と犬江主の見出して。今番の大事は使
きる。那眼力も亦ふく。和郎倘去の地に来て在くぞ。我豈那里の風聲秘密を。恁
まで具に聞くとぞふや。寔に珍重々々と咨言れば紀二六頭を搔く。恁らば今ぞ回正く

もゐれ言ふぐる。小可が親ハ常陸ゐる。鹿嶋の郷士ゐりけるふ家酷く衰へく。二親ともく世を去りぬ。胞弟兄もゐる。憑しれ親族もいふぞ。獨今の東人蜑崎照文ハ我外戚の小父ゐれば。小可年十二の時。迫ふ那里身を寄さく。厄會ふ做りーゐる。習武藝ゐる人業。その師ふ就ーく教られ。近屬猛可ふ引立て。若黨ふして使ゐる。那洪恩ふ答ふべき。ようゐゐーふ這回の大役。東人ふ代れとある。教諭ふ辭ふとゐぞ。左ゆ右ゆ仕り奴。ふも秘言ふいへば。人ゐる噂をきゐひそとそ。創く諦を那身の素生ふ代四郎ハ顧感嘆しそ。然ばゐそ。肇より出処卑しれ人の子ふあゐーどとまぞ思ひーかゐも。蜑崎主の猶子ゐらむと。知らぞ。礼を致ーゐ。許ーゐひ。卒然ら復てそ。這里ゐ逢ふべれとらひく。躾て身を起せば。紀二六ゐ共侶ふ異日を契る。望月の鑑ハ人の信と信。曇ら心潜ぶ宵の那壷盧の宿ゐーそ。五條頭の杪枯ふ寒けれ袂を分ち。遂ふ左右へ別れけり。案下不題。大江親兵衛ハ那日紀二六ふ教諭ーゐ。餅書の計策成りーゐ。傍ふ人のゐれ折ふ餅を投げて。

内ゐる細書と一箇々ふ食出ー。懐ふして皮のまゐる。米饅頭を喫べく。その餘れるを。庭ふ拘児ふ投與へゐ。餡餅をのゐ奴隷ふ取らせそ。當晩変蘭人定りー後。單枕上ゐる行燈の光りゐそ。件の細書を披れ見て。徳用ゐ詭詐政元の佯誑の事情を知ゐりーゐる。その書をとゐ。焼盡して。枕ふ就ゐ思ふゐ。管領陽ゐ台命と唱く。咱們を抑ゆーハ別ふ故あることゐるむと思ひーのゐそ。思ひれゐ。結城の悪僧徳用ハ香西復六ゐ愛子ゐそ。改元主と乳兄弟の因ある者ゐらんと。非如那奴ゐ毒計を薦て我を揣ゐとも。邪ハ是正ふ勝ようゐければ。試數ゐの勝負ゐぞ。我還ゐれ路ハ開けん。又只自然ふ任せんのゐと思慮倒ふ。その夜を安く睡りけり。徳而又一旬許を經く。秋ゐ繞ふゐりー時候。香西復六ゐ奉書をゐく。親兵衛ふ伝へ示ゐ。その書の略ふ。寡君ゐう。ゐく政務の暇を。ゐ。明日對面せと仰ゐる。見参己牌ゐべー。とありければ。親兵衛隨即美書を寫ー使ふ遞與して。躾く准備を整ゐふ。必是明日の見参ハ試數ゐの事ゐるべー。と思へ

ども諒ぐ氣色ありて。その詰朝公服を着け。両刀を腰ゐて。徐ろ宿所を出る程に那堂嘗る
両個の小吏に先に立て案内を致し。両個の隷若黨に左右に従ふ且奴隷に鞋奴あり。柳
笠を持るあり。都て後方に跟てゆくり既にして親兵衛に副玄関よりうち登れば青侍案
内に立て正聽に造らあり。香西復六これを迎て去の日の旨を傳達す。當下青侍案
より徐々と立蒐りて。間る隔亮を。廣く開くとこれば政元に長袴小刀ゐて正聽の
上座に在り。有司に左右に皿維列れる。开ゲ中に又五個の武士あり。或に眼圓に髯再の迹蒼く
或に身材高く骨逞しく或に飾磨紺或に褐色の社衍の肩陜く下短く紀に綸緘の小
袖の緯足らで。肘の見る可るを一樣に被て。二尺五六寸もあらんと云る腋挿の刀を各腰に
跨て。肩を尖し。臂を張り。存々として有司の上坐に在り。又政元の後方に侍る一個の
法師あり。年歳に三十八九ばかり。身材高く。肥膏盈て面皮淺黑く。眼に蚺蛇に似く。
鼻に猴猊の像くるり。鼠色の光絹の小袖二領可襲被て。烏紋紗の法衣の両袖を

巻抗て。身柱の上に。締紈ね。袈裟とび胡意椹ぜ。て。畳ミて扇子に。うち無く。右の
傍に措らける。是則別人なるも刑餘の兇僧德用。親兵衛を杳に見る。眼光凄く。
勢ひ鼈で扣えり。登時香西復六を親兵衛と領て找ミ入り。政元に向ひ額を衝く。大
江親兵衛召に因て參上と。答え上れば。政元則親兵衛を間近く找て。詞徐に示もやう。
大江仁義れ隊より傳達ある。汝の武藝御覽の事。上に御ヨリ敎に御坐せば。まづその
日を卜めかるり。政元先試檢あるべ。毋く雌雄を亶ず上よと。昨日仰出されり是ゆり今日
ある我邸中也。咱们実檢せべ。元者る。武藝の次第。第一に白打。第二に撃剣第三に
鎗第四に弓第五に火銃第六に棒。ゐるべ。敵に則五六名に過ぜヨマくに是當家に
勇士或に又將軍家武林虎賁の英臣と北面の武士も是あり。復六其々其兵毎に汲
會せよと課されば。件の武士を召ゐる。倶に膝とそ找めける。當下香西復六を。親兵
衛に向ひて。大江生是るに白打緝捕の名家と答え。二階に松山城介允可の弟

子。則その地の浮浪人當家の壯佼們ど師と憑めば月俸數口賜いまる。敵齋經緯是と次い擊劍術の師範とて。亦當家に客居る鞍馬海鳥真賢是と又その次い鎗法の達人將軍家の勇臣也。澄月香車介直道是と又その次い騎馬砲自得至妙と名高けれども亦當家の英士也。種子嶋中太正生是なり。又その次い射術の名家昔後醍醐天皇のおん時に南殿近く飛行き。怪鳥を射て隊主と名と揚る隱岐次郎左衛門尉廣有が六世孫。則當今北面の武士なる秋篠將曹廣當是なり。

と一個々に汲會されば五個の武士あるて俱に找出く親兵衛に名對面をまうけ。姑且と改元に從よ親兵衛と喚うけく。今我後方に侍る暴法師い是東國の客僧也。素より當家に俗緣あり。小るに大の僧生れ出くその旅力の剛なる。又那辨慶に弥増て重六十餘斤ある鐵の鹿杖を自由に使ふ本事あり。刱又擊劍剽姚に長る。前砍の但馬和田新發智と云とへども。肩ともせざる者と。他を汝の敵

て加えく。其本事と見まく欲もとの。偽をえらへば。德用躯て找を出く。親兵衛に向て。送に默礼あるのを。件の武士なるの上に坐す。當下改元又いやう。親兵衛並に敵に立べ兵毎も皆听ね。試擊ぶい木刀を。鎗い尖頭と援去れども。或も痛く窮所を擊まて。命と殞ぬもあるべ。彼是も亦知るべ。然る不覺ありとても。是自業自得と送に送恨ふーと云拵言書とまゐらせ。但し真劍をもそせと。請亦もこれあるを。開い又時宜に依んを。輒く許ーかさけれども。神文に載られ皆この旨と沼よか。と宣示き詞と共に有司件の拵言文をあと出く。聲爽やかに讀聽されば。親兵衛並に敵なる武士們と德用も言莱して。各その名字の下に花押を書寫し。指を破り血を濺ぎ。有司則會揚くそ。儘主君に呈覽を。改元情されを見て。有徒れば。別席に退て各各准備をせよ。亭午の時候より我も亦出く勝負と実檢せ。什麽親兵衛能做きや。と問れて。親兵衛然へ。弱冠未熟の身にあると。愁に見出に預りまゐらそ

免るゝ路なし。左も右も勇士達ふ及ばぬくらいなれども。然べとく武士なる者ゞ。敵を怕れて今更ふ云云と辭い稟さば。即坐ふ頭髪を前ゞ棄て。高野ふ入るより外ふ術なし。只あゝ笑ひふ備人のこと答へ。徳用を尻目ふかけて。真勇の魂氣色ふ見れども。改元然とこと苦笑して卒然べ准備といそがね。又後ふてそこだらふ身を起しつゝ奥ふ入ると。徳用一番時見送ア。敵齋ふ向ひていやう。西家法師ふ相応しかゝる武勇の少えあるとの。各位加えられと。傷痛く思はれん。されども三四百年来。叡山の衆徒奈良法師ふ武勇ゝ誉あるも勘くゝ。猫児も釋氏も推並さ。皆是圓家の民ゞ。義ふ仗て弥陀の利剣。振ざるとゝ。非如真剣ゝ。我一棒を喫ん者。孰ゝ往生せざるべ。然べ死しても怨ゝと神文ふ載ゆ。館の賢慮脱落る。実ふ敬服々々と誇ると。復六推禁めて。要ゝ宏言せむも在れ。卒犬江生諸勇士達且別席ふ退て。儲の饌と賜て。准備とそ。といそがせば。青侍们ゝ。親兵衛と徳用を分ちて。両室ふ案内しつゝ。餘の敵

の武士ハ一席ふ。皆共侶ふ案内ふ就て。その席ふ赴ける。小間ふ時移りて。鳴く正午の土圭と共ふ試數と。促も大鼓音數々と。少えけり。登時犬江親兵衛ハ。身甲ふ肱甲脛当ふ。袴を高く結ゞ。伏姫神授の短刀を腰ふ帯び。小月形の名刀を右ふ引提て。青侍们ふ案内をせられ。徐ふ庭ゝ。儲の場ふ赴く程。ふ那五個の敵ゝの武士。安敵齋經緯。鞍馬海彷。真賢。澄月。香車。介直。道種。子嶋。中太。正生。秋篠。將曹。廣。當ハ各一二の弟子ふ。木刀槍棒。弓。前。鳥銃。銃丸。鑑硝を持て。出て試數の場ふ聚ゝ。ふ中ふ徳用ハ南蛮鉄の鎧衫の上ふ白綾の小袖と被下し。烏紋紗の麻衣を高く褰げて。辮紐り。結び紈ね。聖柄の戒刀と腰ふ跨ぐ。銀の鉄打る細鎧の釬。十王頭の蹬纒ふ身を固め。鼠色る光絹の千葉巾ふ。金の左纏の顱纏あると眼宵ふ。戴ゝ。靹。漆の綿紗の三幅糾合しる。裙を掛るゝふ。那新制衣の鐵の鹿杖。六十斤るゝと腋挾ゝ。足ふ白苧の戰鞋の重底るゝと。穿。做て。隨從の徒弟陸釋坊堅削ふ。

発児と執〻く乃誇張出る面魂苛めく。一人當千の威風あり。その他五個の武士毎も或は鎧形或は身甲。衣の下ゆ透間もなく武具せざる者もなく。小袖袴ゆ綺羅を盡して。繻紐の裨一様ゆ。その日と晴と打紛ツめく。徳用が華麗ゆ。四下と拂ゆ勢ひ及ぶべくもあらざりけり。然がその処ゆ素是走馬場頭ゆして。五十間ゆ八間の平坦。左右ゆ結縷草生の小塘堤あり。井を二十間ゆ五間の際。袖搦可の四目れ離笆と締造らしる。四方ゆ両折戸の小門あり。則這里と試艘るの場として。南の塘堤ゆ高く假廏閣と構えるその作りざま勾欄ゆ似て。檐下ゆ紫の天幕と張耳。後方ゆ五六雙の金屏と建続らして。肱掛の欄干ゆ猩々緋の氈幾ともるく掛れば。四下も赫奕可き。吉野龍廏閣の春花秋葉を一度ゆ長覩る心地もそう。這假廏啓ゆる堤塘の下ゆ縁道ゆ席と布き。執筆の有司二三名小机ゆる硯の墨堅と磨るどしつ。合る合の次第簿を開き見て。将ゆ雌雄と録さんとも。又北ゆる堤塘の這方四目れ離笆の内ゆ黒紗の打裂外套

純子の野袴穿て。鮫柄の両刀と帯る両個の実検使発児ゆ尻と拭て在りしの餘。介添の武士五武師の門人職役ある者勘らぬ。敬言固の走卒一百名ゆ捍棒を衝立く。塀の四方と守りて。又鞍揩る色々の馬數十頭各鑣奴ども牽ゆて来ても亦堤塘の下ゆ在り。今日の儲ゆあるべれども。その數殊ゆヨるゆは武備を示さえ為る狩勝者ゆ牽出物の准備そうと人食思へり。却試艘るの時ゆ臨く。大鼓と鳴らしてこれを促鉦をりく退く暗號とも。有司見るの幾箇條と死しても怨るとふ拵言書の神文を親兵衛と敵るの武士们と。徳用ゆ復讀示して。改元の命を伝ふ有徒一程ゆ改元ハ華美る衣紋裃ゆく。小刀とのみ帯る。大刀とば胡意近習ゆ執らして既ゆ假廏閣の中英ゆあり。その日扈從の老黨若黨香西復六を首ゆく。有司近臣三十名都て公服の肩と比べ袖を列ねて齊整と。左右二側ゆ侍りて。姑且〻又試艘ると促る大鼓撥と早めて打鳴せば。東の方ゆ小門より。試艘るの艶ゆ入る者ハ是則別人るぞ。犬江親兵衛

発児と執ーくー乃誑張生くる面魂苛めく。一人當千の威風あり。その他五個の武士毎も或ハ鎧形或ハ身甲衣の下ゆ透間もなく武具せざる者もなく。小袖袴ゆ綺羅を盡して。繻紐の裨一様ゆその日と晴と打紛ッめくゝ。徳用ゞ華丽ゆく。四下と拂ゆ勢ひゆ及ぶべくもなえざりけり。然ハその処ハ素是走馬場頭ゆして。五十間ゆ八間の平坦へ左右ゆ結縷草生の小塘堤あり。开を二十間ゆ五間の際袖揭可の四目ハ離笆と締造らーる。四方ゆ両折戸の小門あり。則這里と試艮ゆの場とーて。南の塘堤ゆ高く假廏図と構えるその作りざゆ勾欄ゆ似て。檐下ゆ紫の天幕と張耳。後方ゆ五六雙の金屏と建続らーて肱檝の欄干ゆ猩々緋の氈幾ともなく掛ハれ四下も赫奕可き。吉野龍田の春花秋葉を一度ゆ長覩る心地もち。這假廏図ある堤塘の下ゆ縁道ゆ席と布き。執筆の有司二三名小机ゆる硯の墨と磨るとーて。合ゆ合の次第簿を開き見て。将ゆ雌雄と録さんとも又北ゆる堤塘の這方四目ハ離笆の内ゆ黐維紗の打裂外套純子の野袴穿て。鮫柄の両刀と帯ゆる両個の実検使発児ゆ尻と拠て在り。その餘ハ介添の武士五武師の門人職役ある者勘くゝ。敬言固の走卒一百名ゆ捍棒を衝立くゝ堺の四方と守らーて。又鞍揩ゆる色々の馬数十頭各鑣奴ゆ牽めて来て。ゆ堤塘の下ゆ在り。今日の儲ゆあべ名れども。その数殊ゆ多ゆ。武備を示さん為ゆ挨勝者ゆ牽出物の准備ゆ。人食思ゆ。却試艮ゆの時ゆ臨くゝ大鼓と鳴らーてそれを促ゆ。鉦をゆくゝ退く暗鵐とも。有司ハ名ゆの幾箇條と死ーても処ゆーとゆ拉言書ゆ神文を親兵衛と敵ゆの武士们と徳用ゆ復讀示ーて。改元の命を伺ゆ有恁一程ゆ改元ゆ華美ゆる衣紋裨ゆくゝ小刀とのみ帯ゆる。大刀とハ胡意近習ゆ執らーて。既ゆ假廏図の中英ゆあり。その日扈從の老黨若黨香西復六を首ゆくゝ。有司近臣三三十名都て公服の肩と比べ袖を列ねて。齋整と左右二側ゆ侍ゆくゝ。姑且くゝ又試艮と促ゆ大鼓撥と早めて打鳴せば。東の方れ小門ゆ。試艮ゆの花絶ゆ入る者ハ是則別人ゆ。大江親兵衛

仁義。袴の稜とり結さゝる。身装上ゐ寫ゑーどく。先政元の假殿圖ゐ向ひて。跪居く低頭揖讓の礼正うゑて阿容る色ゐ。更ゐ又西ゐ向ひて。徐ゐ敵ゑ〻ゑら程ゐ介添の武士長ゆ。ゐる。棒木刀ゑ携ゆて。親兵衛の後ゐゐ。隊より第一番ゐ白打槍棒と定められーゐ。鞍馬海傳真賢ゐ惴雄の猛者ゑれゑ。悚ゑ〻ゑ絶内ゐ找ゑ入り。両個の実検使ゐうち向ひて。大刀ゐ是戰場ゆく。第一の器械ゑれゑ。即これを短兵、といゐ。白打ゐ近来の武藝ゆく。式ゐ巷路軍組數ゑゐ要ゐるのゑ。在下御免ゑ蒙りて。第一番ゐ找むべーと。詞ゆ〻ゑ〻。斷ら演ゆ。答ゑ〻ゑるゑ。親兵衛の身邊ゐ造りて。相距ること五六尺の程ゐ在り。跪居く迭ゐ黙礼ゑ。海傳ゑ介添ゐ。則允可の弟子ゆく。從ふく後方ゐ在り。携ゑる赤樫の木刀の長三尺許ゑると。對坐の間ゐ措く程ゐ。親兵衛の介添も亦携ゑる木刀ゑ生ゑを。親兵衛急ゐ推禁ゆく。否晩生ゐ熟ゐる。這鐵扇ゐゐゐ。海傳ゆ。ゑ〻ゆく。原来洒家ゑ敵ゐゐ足らぎゑと。和主ゐ思ひ侮ゑる狄。然ゆ〻ゑ酷く輸ゆ

折器械短ゑ故ゑゐゐと。分説種ゐせん為狄。烏滸技をせゑ。木刀ゑ含ゆゐと。兵衛莞介ゑ笑ゆく。否ゑゑ。開戰の利ゐ器械の長短ゐゐ。ゑ〻ゑ敵のヨメ立募ゐ縁ゆ。その場の廣狹ゐ據ゆて。甲も乙も俱ゐ要ゐ。長ゑゐ數ゐ利ゐれども。刺ゆく。ゐ不便ゑ豈徒長ゑを利とのゑせんや。とのひゆく腰ゐる銕扇ゑ。抜ゆ。右ゐ含ゆて這銕扇ゑ。我為ゐ活人殺人二劍ゐ勝ゆ。要ゐる。膽言ゑ前ゑゆ。卒ゆ本事ゑ試めゑと。窘られて海傳ゐ性起ゆ。滿面火のゑく。憎ゑ小猴子ゑ似而非廣言思ひ知せゑ。覚期ゑせゑと。罵る武者聲苛めゆく。木刀ゑ集く掻含ゆて。衝ゑ身ゑ起ー。耶ゑ聲ゑ。眉間ゑ莅く丁ゑ數ゆ。ゑ親兵衛ゐゐゆ。身ゑ反ーゆ。銕扇ゑゐゆ丁ゆ。托地ゑ受流ー。打拂ゐ修煉精妙。神出鬼没電光石火の眼ゐ見ゑ。又ゐ陽焔飛禽の形ゑ影ゐ尺る如く。ゐゐ。ゑ含ゆれゑ。數ゆ。ゐ數れ。海傳秘術ゑ畫せゑ。ゐ是數千の銕扇ゑゆく。柵掛て八葉二十葉ゐ那身ゑ圍ゐ異ゆゑ。然ゑ這鞍馬海傳真賢ゐ年齡

文溪堂藏

四十許。身材五尺八九寸。烏髪ふりて胃毛赤く色淺黒く。皆刻衣けく。聲は銅鑼を鳴すが如く。鞍馬八流撃剣の妙奥を極て京師に名あり。その教を受る者子弟多く數ふべし。ある時天の下に敵なしとのみ思ひ誇れる自負大言して忌憚らぎ況今親兵衛が少年にして優悄なるを。敵なふ足らぎと侮りて。敢今合の次席を守らず。辱く真先に找出て只一撃なに仆さんと思ひ。ゆゑぎ拐れて。受刀のこなしの猶精神を励して。嘯き叫ぐ戰ひの間話休題。介程に大江親兵衛は海賊が出没を蒐る。修煉の木刀を物ともせぎ。一尺二寸の鉄扇を以て。幾番とゐく左応右接て其疲労るを待る程に海賊竟に神衰へ刀筋乱れて醉るが像く。蹌々として走蒐るを。親兵衛は手を引外して鉄扇を以て海賊の右の拳を礙と撻ん。撲れて骨や摧けん。憶ぎ木刀を真哩と隕して怯むを透さぎ一と蹴る。至妙の白打は海賊が筋斗りを仰さまに地响高く平張仆まで。一番時に起あ能ざりしと。介添の弟子等。驚ぎ聯拔起して。肩に携へ退けり。登時親兵衛は介

添る一個の武士。准備の水と沙碗に汲くこれを薦ゆるを。親兵衛はその水をのく。絶ふ口を漱ぐのみ。迫若とせず又敵なるを程ふ。ち鳴を大鼓と共に離色の西の小門より徐に找ん入る武士。是則別人なるぎ。槍棒白打はその名ゆゑ。敵齋經緯なるの。ふも亦年歳の四十の過ぎ。臂縛身甲に身を固めく。袴の弓折精悍く。介添の弟子と。二人後方に従へる事の形勢海賊に越られざれども。恨る色なく。先実撿使に黙礼して。恥く親兵衛に立向ひて。跪居て莞然とうち笑く。遠い大江生目今の御本事。敵なふ足るべ我なるねども。擇ふ因く辭ふ由なし。一棒試のくりとふを親兵衛うち聽て。現是棒に長兵なる。鉄扇ふて相応しかるべ。晩生も棒をとりく。御敵なふ立んとふ。答ふ左右の介添が素樫の棒の六尺なるを。両個の傍ふ差出して。迭に合て身を起せ。敵齋經緯いとぶ儘此に退て。件の棒を隙てとり。又敏く扱てとり。合を直して輪々とうち振ひ。但風車の輪なるが如く。現經緯も分く為ぎ。いとかりとく見えけり。

既ふして敵齋に更ふ又棒を含む直して。然らば参ふ大江生とらひつ伝と找向ひて身を構へたり左右ろく敷ゆ。猛可よ悩る面と頻単めて。嗚呼とだろふ又聲かけて。後よりの犬江殿と禁めて些し退ぞ。咱が近曽折ふ觸ら轉筋痿壁の持病あり。目今ふ赤ゐ病痾猛可ふ發りく筋動ゆる脚癱れて堪らあり。遂憾くい思へども。将息をも異日のるれせ実検使達あの義ぞとて。宜く仰上られよ。痛ー疼ー。とだろふ棒を真哩と投棄て脚を曳ゝ退げ。介添の弟子们ふ呆れて目と目を注ぎるのみ。得棒を拾抗て。俱ふ後ゆ従ひけ。是より騎馬の爭ひ。これば実検使ゆ。親兵衛を。労ひ推退かして。共ふ罷りて。主君政元ふ親兵衛海偽ゆ勝負分明の事及ゆ敵齋ふ急病起りぬとの言趣を。詳ふゆえ上れば。紆緯ゆ弟子と貝ふ員の毎と除くの外ふ目を注ー袂を披て。敵齋ゆ狡黠さよ海偽ふ見懲して。術より免れん為ふて。然るに急病ふ發りけあ。許しぬで又推出ぎく。下高撻して懲さぬと。其ふ指さて。詣られ笑ふもヨろけ。是より鎗ふ騎馬ふーく。

雌雄を決めべーとふ。豫の定りければ。その鎗尖を拔去りて。代るふ白粉をヨヲく裹る。素絹れ裏裏の形毬のごくるるとせれ。人ふ烏草紙の身甲。涅ふ袖黒羅紗の戰袍を被るべく。馬ふ驪を用ふべーと。既ふその准備あり。則親兵衛と香車介ふその件を賜ひけり。當下澄月香車介直道ふ実検使ふ就て。陳ぜるやう。在下既ふ大江親兵衛ゆ本事をえて知ぬ。他ふ少年と云とのへども。実ふ一人當千ゝ遮莫倘戰場ゆ。衆敵と相挑まば首級喪ふとも。あるべ。佳れば今在下ふ相士一人を借しみ。必や克ひむ。只單身ゆて十二分。誉を取りかー。と渋りけり。改元これをうちゆて。原来直道ふ後れる一個の帮助を。乞ひ。よく鎗術ふ煆煉して。今親兵衛の敵ふ足る者他ゆ外ふいまゞ。その人を。何ぬせんとふ詞ふまゞ。訖らぬ。政元の後ふ侍る。近習の中ふ壮士あり。忽地聲を。ゆり立て。我君ゐどて人ゐーそ。英氣を。貶しぬふぞゆ。と呼りつ突然と。找出。主ふ朝ひて。恭ーく額を。撞くゆ。改元驚ゆ。ゐーく。熟視るふ。ある亦近習の一人ゆ。紀内鬼平五景紀と。喚做を。者ゐ。

その人さる。身材低く面ハ枯る鮮蟹の如く勇ハ車ニ逆ふ螳蜋ニ似たり。當下鬼平五頭を拾げ。憤然として稟まさう臣名鎗術の一藝ハその奥妙ニ至らねども總角の比ろ。好く投石を事とせり。竟ニその技ニ自得して。杪ニ集る鳥梁を走る鼠それを打ニ謬ることなし。実ニ是百發百中。百歩を隔て柳葉を穿ちしと。養由基が弓箭ニも優る本事。あれば人みな並く賞感のあまり。則臣名ニ綽號して今二町と唤做す。恁命なる言のまろ。昔源為朝の勇臣と。ゆえなき二町研紀平二大夫の本事ニ伯仲されば。ちの名を君も聞召けむ。くく澄月生の帮助の相士ニ臣名を仰付さる。親兵衛を仕さんと。囊の物を取るより易ろ。いくくと諄返して。連りに請て已ざりし。改元听て。是ニ応えざれ。投石飛器なり。敵を増て二人ニ做さまう。面正しくも。吉凶ニ飛器ハ。先ちの旨を親兵衛ニ告て答をゆけかと。指揮ニ実検使名ちろ。退て。親兵衛ニ件の一説を伝ニ。允

二町研紀平二大夫の故事を改て之を

允ぬ。

允ぬや。と請問へば。親兵衛答て。然ン。ニ単身ニ。一個の敵を。望て。戦場ならば。爭何ハせん。然ども。投石ハ難義の敵を。那保元ニその名ゆえ。二町研を除くの外。唐山ニも二三名あり。所云曹國の武大智ハその弟子。猩飛と。俱ニ投石を。武功ありし。六合内外項言。又近曽明の呉門の彭興祖の弟彭某の如くも投石ニ妙あるよ。巻の十六。五雜組人の部を見ぬ。且近曽舶来の稗史小説元人羅貫中の水滸傳ニ没羽箭張清あり。没羽箭ハ羽なき箭。投石ハ羽なき箭の如し。因て水滸伝の作者。則かの綽號とも。意ニ今の紀内生も。亦その類ニ。そもそもむぞらあ。おくべ。只その一人ども。防ぐこゆる敵をあくむ。左右ニ敵と受んと。心許るる技なれども。推辭まば。後ちまでも。似て。勇士の恥る所なり。左ニも右ニも仕らんと云。早の応ニ実検使名ちる。亦復。假廃図ニかへ来て。隨即主の政元ニ。親兵衛が答箇様々々と。具ニゆえ上しかば。然ら准備を急げと。改元則鬼平五。願ひを許して立れば鬼平五。欣然と言美して走り

第三戰
親兵衛
直道景
紀を懲す

出づ香車介の身邊に近く。恁々と告ぐ身装を整へ。姑且して第三戰の蓋大鼓又鼕々と响くと暗號に東門より犬江親兵衛の馬上雄々しく壯装ひ来る。槍と腋挾み。徐々と入り来る程に亦西の小門より。香車介も馬を找る。一様の身壯衣馬さへ都て黒ろけの恁而雙方馬を寄せ。名告りけ槍を拈く。一上一下と厮挑む迭の修煉に秘術を盡すべ勝負孰と見る程に既に〻直道い堪ぎや下槍ふるひ〻より親兵衛の槍の杪に附る嚢の白粉ぱく〻突る毎に衣裳に塗まる。隱さべうもあらばれば。初黒かり〻戰袍衣の襟さへ胸肩さへ白點駁斑ふるひけり。浩処に紀内息平五景紀い身甲衣裳精悍き。馬に拍れ西門より。甘奪地に走らし〻ち。働と馳拔て。親兵衛の後方と距る程十間許。馬の鼻つら無旋らして。研を飛して親兵衛を。打隊さんと構へる畢。竟景紀投石して。親兵衛を打隊さも。否や。开に又下の回に解分ると聽ねか。

南總里見八犬傳第九輯卷之二十五終